

農に生きる 無農薬無化学肥料米づくり四十年

大崎市三本木 小関俊夫

若いころ農に生きるとは思っていませんでした。

農家の長男に生まれましたが、農業が嫌いで東京に憧れシルクスクリーンの技術を学んだものの、私より腕のいい人がいっぱいいて、これでは食えないと思い一年で家に帰って来たのです。今になるとそれが良かったと思っています。

親父の米作りの手伝いのようなもので農業に身が入らなかったし、農薬と化学肥料がなければ米作りは出来ないと思っていました。

山登りをしていたので、三十代半ばで、田んぼを自然に近づけようと考えていました。決定的だったのは「玄米を食べたい」という女房の一言でした。玄米なら無農薬無化学肥料の米づくりしかありません。一反歩からはじめ五反歩まで増やしました。現在二町二反歩です。手押し除草機をかけて六月、七月は女房と二人で連日田の草取りでした。草を取ると言うよりは田を這う感じでした。

白神山地の春秋林道建設反対運動を知り、登山者仲間と、昭和六十年に、船形山のブナを守る会を立ち上げました。船形山では、林野庁による拡大造林施業でブナが伐採され、スギ、ヒノキが植林され、山が荒らされていくのを心ある人たちが嘆いていました。言い出しつへの私が代表世話人になってしまいました。自然を保護するのではなく自然に生かされているという思いでしたので、ブナ伐採反対の署名活動に取り組みましたら、二万筆以上の署名が集まり、それを林野庁はじめ関係機関に提出しました。その後林野庁はブナ林のもつ水源涵養かんよう、土砂防止など公益的機能を見直し、ブナ伐採は止まりました。

田の草取りに這いながら稲の葉を下から見上げると、葉脈がはっきりしていて黄緑の透き通った色。山登りしながら「ブナ」(樺)の大木を見上げた時の葉とそっくり。農薬、化学肥料を使用しないと田も自然に帰っていくことを実感しことのほかうれしかった。

そして五年間一反当たり五俵の収穫。田には五俵の力がある。田に堆肥をいれたら七俵になった。肥こえとは収量を上げるためにあることも知った。すべて体験から学んだ財産です。

田の草の変移

田がすこし肥沃になると一面のマツバイが消えて、ヒエやホタルイが勢いをのばし、田のあらゆる草が出てきました。ミズカヤツリにヒロムシロにオモダカにウリカワにクログアイ、十五年目にしてやっとコナギが現れ、それはとつてもうれしかった。コナギは土を浄化するといわれているのでコナギを残して田の草取り。指で触るだけで草の名が分かるようになりました。

除草機三回押してから手取り。草との闘いでしたが、いつの間にか舞踏になっていました。

田の草取りは心身を鍛えてくれました。

紫の小さな花を咲かせる可愛いコナギが大きな化け物のようになって田をおおった。翌年コナギはいなくなりました。植物の勢力拡大の終末を見た気がします。金魚草も出てきて草も少なくなってきましたが、草の変移は続いています。

今はキカシグサにおおわれています。手押し除草機をかけながら、コナギのように絶滅するか稲と共存するかを見ていきたい。

田の虫

日本には稲の葉を食うだけのイネドロオイムシがいましたが、今は外来種のイネミズゾウムシに稲の葉をくわれ根もくわれて稲株が消えていくひどい害虫。しかし、稲体が硬くなる^と柔らかいヒエやホタルイを食ってくれるので益虫になる一面もありますが、被害の方が多い。殺虫剤を使用しないので住み心地がいいのかどんどん増殖していくので、^{おとし} 匍苗(緑濃く若い苗)を早朝田の畦際にポンポンおいていく。午後三時頃に一株に二十四以上もイネミズゾウムシが群がっている。匍苗を回収して鶏にあげる。まるでイネミズゾウムシを飼育しているようです。

自然への冒瀆

地球を破壊するだけでなく人間の驕りで生物の遺伝子組み換えやゲノム編集が始まりました。

岩手県でも岩手生物工学研究センターでゲノム編集米「新金色の風」を発表しました。

ゲノム編集米「新金色の風」

宮沢賢治の古里岩手にも

粃数増加遺伝子

耐倒伏性遺伝子

高温耐性遺伝子

組み込まれた

ゲノム編集米「新金色の風」

がやってくる

冷害から作物を救うため

岩手山を噴火させようとした賢治

農への想いは

生物工学へ向かったろうか

生物界にはないゲノム編集作物

岩手の地はうけいれるだろうか

銀河鉄道の夜に

新金色の風は吹かない

スマート農業が食料危機を救うというが、奥羽山脈に抱かれ大崎耕土で農に生きられる私
はしあわせ者です。

畦に寝て青い空と白い雲をながめながら。

2024.07.06 仙台・羅須地人協会 連続講演